

1 研究テーマ設定の理由

(1) 児童の道徳性における課題から

- ・ 素直でまじめな子、友だち思いの優しい子が多い。
- ・ 自己肯定感、自己効力感が低い、あいさつ・返事・場に応じた行動ができにくい、友だちに左右されやすいなど。
- ・ 内容項目についての教師の見取りから、「公德心」は低いポイントを示している。

『規範意識の育成』を中心に置き、それを支える価値に迫る「道徳の時間」の授業づくりが不可欠。

(2) 「道徳の時間」における課題から

- ・ 話し合いを活性化させる発問後の手立てとして、葛藤討議を促すことが十分できていなかった。
- ・ 自分自身を振り返り実践に対する意欲を持つ生活体験の位置付けを明確にできなかった。

「道徳の時間」において、高い価値に気付かせ規範意識を育成するためには、児童の対話による相互作用を位置付け、教科等の事前体験・事後体験と「道徳の時間」を関連付けなければならない。

2 研究の特色 特に目指したこととその手立て

(1) 研究仮説

道徳の時間において、価値レベルを高める対話を行うとともに教科等における共通体験を位置付ければ、規範意識を育て、道徳的实践意欲を高めることができるであろう。

「規範意識を育て道徳的实践意欲を高める」

「規範意識」とは……「個」から「公」への考えに立ち「他を慮り自己を生きること」、つまり「同じ空間、同じ時間を共有する者が互いに過ごしやすい場を生み出すこと」ととらえた。

「規範意識を育てる」とは……「規範意識の育成」に視点をあてた時、「善悪の判断」や「マナーを大切にする・ルールを守る」等のみの学習や体験・経験だけでは不十分であると思われる。そこには、「なぜマナーが大切なのか」、「どうしてルールを守らなければならないのか」等を思考する中で規範意識を支える様々な道徳的価値を高めることが大切になってくると考えた。

(2) 研究仮説の具体化

① 『価値レベルを高める対話』

価値レベルを測定する基準

ローレンス・コールバーグの道徳性発達理論を参考にし、価値レベルを測定するおよその基準を設定した。

《価値レベル表》

価値レベル3	自律的	気持ちがよくからする ルールだからする 褒められるからする
価値レベル2	自己本位	得だからする
価値レベル1	他律的	叱られるからする
価値レベル0	好き嫌い	好きだからする

価値レベルを高める対話

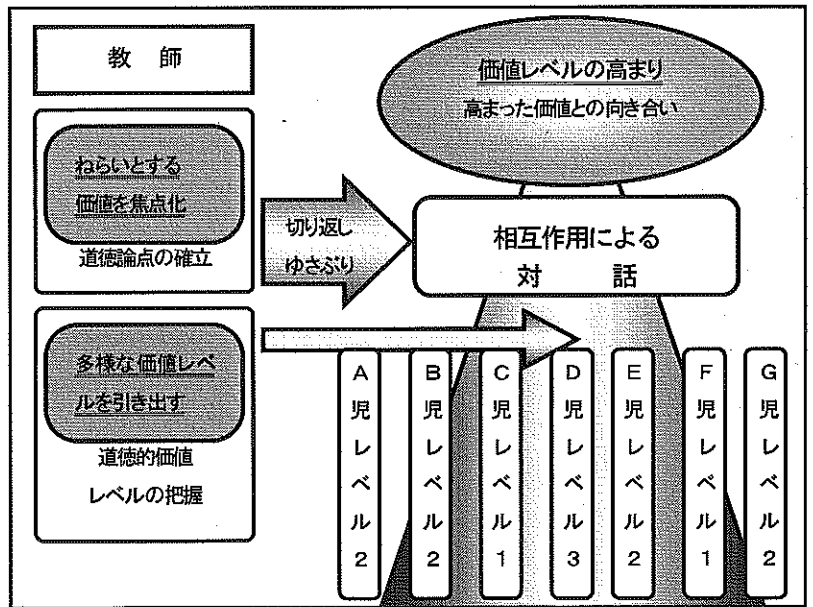
価値レベルを高める対話とは、価値と向き合い児童の相互作用によってより高い価値レベルに気付くことである。具体的には、教師が児童のもっている多様な価値レベルを引き出し、ねらいとする価値にせまるために児童の発言を抽出し論点を明確にして対話を進めていくことである。留意して行う点として次の3点を挙げた。

- ・ 心情や行動について、ワークシート・心情円板・ハートグラフ・ネームプレート等を活用し意思決定させる場を設定する。
- ・ 意思決定に至った理由を明確にして発表させる。
- ・ 教師はコーディネータ役として、児童がねらいとする価値レベルに気付くことができるようゆさぶりや切り返し発問を行いながら、価値の類型化をはかり、構造的な板書で整理する。

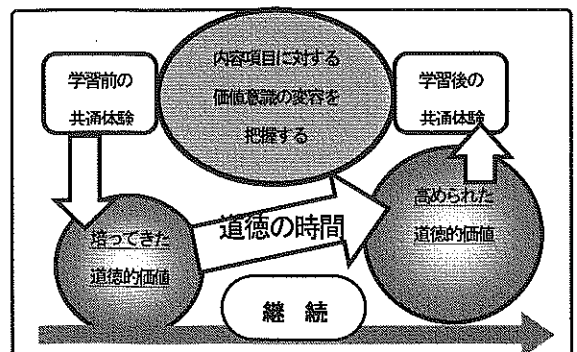
② 「共通体験を位置づける」

教科等の共通体験で培われた道徳的価値を「道徳の時間」に活かしたり、「道徳の時間」に高められた価値を教科等の共通体験で活かしたりする。この

《価値レベルを高める対話》



《共通体験の位置づけ》



ことにより価値意識の焦点化と継続ができるとともに、自分の価値と向き合っ具体的自分自身を振り返ったり、具体的な実践に対する意欲を持ったりすることができる考えた。

本校が考えている教科等との関連とは、「道徳の時間」を中心に前後1～2の共通体験を短いスパンで位置づけ、関連する活動において内容項目に対する価値意識がどのように変容していくのかを把握しようというものである。そのために、「道徳の時間」の内容項目と共通体験の時間の関連を明確にした学習プログラムを立てなければならない。また、行事や活動を企画立案する際には、行事や活動のねらいと関連する内容項目を抽出し道徳的なねらいを設定し、あわせて記入した。このことを通して学校行事と「道徳の時間」の関連を図った。

3 研究の評価

(1)道徳の授業から「規範意識の育成」を検証する

- ① 事前・事後における意識調査結果(量的データ)
- ② 授業における児童の発言内容やワークシートの記述内容(質的データ)

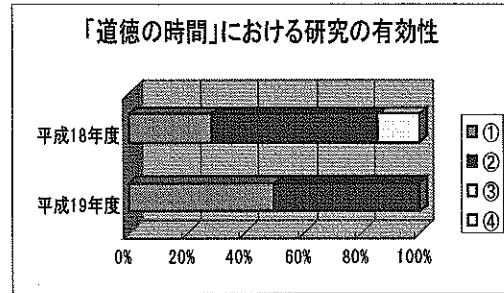


仮説検証授業(研究授業レポート)

研究仮説の有効性について、授業者が①②の2視点で自己評価をすると下のようになった。

(人)

	H18年度	H19年度
①研究仮説の有効性は証明された	4	7
②研究仮説の有効性は証明されつつあるが継続して取り組む必要がある	8	7
③研究仮説の有効性ははっきりしないので継続して取り組む必要がある	2	0
④研究仮説の有効性は証明されなかった	0	0



○ 研究仮説に対する肯定的な評価は平成18年度86% 平成19年度100%であった。

(2)道徳的实践から「規範意識の育成」を検証する

- ・「高屋東小かがやきっ子10か条」における児童の意識調査、児童の実態に対する教師・保護者の見取りの結果(量的データ)

児童、教師、保護者ともほとんどの項目において肯定的評価の割合が増えた。三者の意識調査をまとめてみると、結果(高屋東小10か条 全項目の肯定的評価平均割合)は次のような伸びとなった。

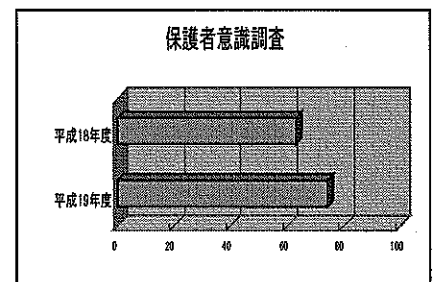
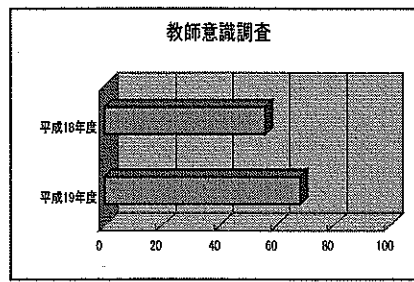
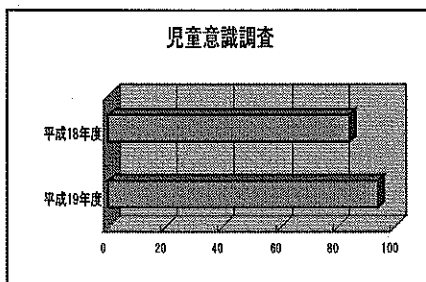
《高屋東小かがやきっ子10か条》

1 あいさつ	2 返事
3 聴く態度	4 言葉遣い
5 後かたづけ	6 思いやり
7 時間厳守	8 廊下歩行
9 清掃(手伝い)	10 ルール遵守



《高屋東小かがやきっ子10か条全項目の肯定的評価平均割合》

	H18年度	H19年度	伸び
児童	84%	92%	8%
教師	56%	68%	14%
保護者	63%	74%	11%



児童の道徳的实践における児童の意識調査、教師・保護者の見取りの肯定的評価に伸びがあった。これは、児童の道徳的価値を意識した姿ととらえることができる。

4 研究仮説の証明

道徳の時間において価値レベルを高める対話と事前・事後の教科等における共通体験を関連させて位置付けることは、規範意識を育て、道徳的实践意欲を高める上で有効である。